CAZOTTE

Le Diable amoureux

La Biblioteca di Babele

collana di letture fantastiche

diretta da Jorge Luis Borges

Kokusho Kankokai editore

J・カゾット　悪魔の恋　渡辺一夫・
平岡昇訳　刊行者佐藤今朝夫　組版大
日本印刷　印刷セイユウ写真印刷　製
本大口製本　一九九〇年一月二十三日
発行　東京都豊島区巣鴨三―五―一八
〇三―九一七―八二八七　国書刊行会

目　次

序　文　J・L・ボルヘス……
悪魔の恋……　1

国書刊行会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

バベルの図書館 19

ジャック・カゾット

悪魔の恋

渡辺一夫・平岡昇 訳

編纂/序文

編集協力　マリア・エステル・バスケス
装丁装画　フランコ・マリーア・リッチ
マルチェッラ・ボネスチ
序文翻訳　土岐恒二

Original Title:
Le Diable amoureux

Copyright © 1978 Franco Maria Ricci editore, Parma, Milano
Japanese translation right arranged with Franco Maria Ricci editore
through Motovun Co. Ltd, Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

序文

歴史を世紀ごとに分割することは、おそらく空間を点で、あるいは時間を瞬刻で分割することに劣らず恣意的なことであろうが、そうした単位はわれわれが想像力を働かせる助けとなる原型なのであって、どの世紀もそれぞれ首尾一貫したひとつのイメージをわれわれに提示しているのである。驚嘆すべき第十八世紀はヴォルテールと百科全書の世紀であったが、それはまた、スウェーデンボリとその反逆的な使徒、ウィリアム・ブレイクの世紀でもあった。たぶんそれはオシアンの世紀、澎湃たるロマン主義運動の嚆矢となったあの偽作者オシアンとケルトの史詩の世紀でもあったことを思い出すのも無駄ではあるまい。こうしたどっちつかずの性格はジャック・カゾットの『悪魔の恋』にも反映している。これはれっきとした明晰なフランス語散文で書かれているが、そこに語られている物語は幻想的なものである。すでにヴォルテールが『ミクロメガ

ス』や『白と黒』においてそういった例を提供しているし、アントワーヌ・ガランはすでに『千一夜物語』を西欧に紹介していた。その表題はやがてカゾットの『千一無駄話――立ったまま眠るためのコント集』に名残をとどめることになる。同様に、『悪魔の恋』はル・サージュの『跛の悪魔』の意図的なアンチテーゼであるが、カゾットの筋立ては、アルヴァーレをわがものとするために女の姿を装う悪魔の奸策、と言っただけではすまされない。悪魔は、あたかもその束の間の仮面が、逆に彼をこの作品の正真正銘の悲劇的な女主人公へと変えてしまうほど己の本性を一変させてしまったかのように、自分が仕掛けた罠にはまってアルヴァーレに恋してしまうのである。ビヨンデッタには、ポルティチの廃墟でアルヴァーレの呪文に応えて「何ぞ御用？」（ケ・ヴォイ）とイタリア語でいう醜怪な精霊の面影はなにも残っていない。仮面が素顔となり、悪魔のような誘惑者が誘惑される女となって、牧歌的な挿話にみちみちた物語のつづく間、不安に怯え、すすり泣きながら、ずっとそういう女でありつづけるのである。一度ならず、ベエルゼビュート＝ビヨンデッタはおよそ女が男を誘惑するために考え出す手練手管のかぎりをつくす。ことさら浮薄な文体は恐怖を玩（もてあそ）んでいるきらいがあるが、もっと後世に現われたヴァテックとは異なり、決してわれわれを怯えさせようとしているわけではない。カゾットは、自作が近代のプロクルステスとも

いうべきジークムント・フロイトの病理学的神話に組み込まれるであろうことを予見できなかった。プロクルステスの使徒たるガブリエル・サアドは、ベエルゼビュート＝ビヨンデッタが作者の父と母の一体化したものらしいと結論づけているが、そのようなものは、彼が解釈しようとしている当の書物よりもさらに荒唐無稽だし、確かにもっとおぞましい。さらに言えば、魅力においても劣る。

カゾットは一七二〇年頃ディジョンに生まれた。ディドロやジョイスのようにジェズイット会の教育を受けたが、彼らとは違い、キリスト教への信仰は棄てなかった。ノディエによれば、カゾットは、二十歳のとき、すでにパリに出て次のように書く。「ぼくは孤独の、内省の、漠としたとりとめのない黙想の、愛好者でした……　ぼくは、たとえ外面的人生のどんなに日常的な相の発現するところにいようとも、ほとんど全世界から、自分を完全に孤立させることを決意しました。そのときのぼくは、顎まで丁寧にボタンをかけた丈の長い衣を着て、縁の垂れた丸いひしゃげた帽子をかぶり、鋼鉄の留め金で締められた生皮の脚絆を巻いていました。加えて、髪粉を振っていない、額のすぐ上で切りそろえた髪が、うなじと両肩に垂れ下がっていました。」一七四七年、海務局の監察官の資格をえてマルチニック島へ配属される。そこで島の執権の娘、エリザ

ベート・ロアニャンと結婚した。それから二年後、イギリス人の侵攻を撃退する。やがて晩年の手紙で、彼は、マルチニック島民が共和国の兵士たちの攻撃から身を守るために挺身した抵抗の記憶を喚起することになる。きまりきったお役所仕事と同時に、カゾットは、妻の持参財産である農場で働くことに時間を捧げる。そして一七五八年頃、彼は故国へ帰る決心を固める。すでにジェズイット会は、こんにち「トラヴェラーズ・チェック」という名で呼ばれている広範な銀行システムを創設していた。カゾットはその銀行システムと、彼を教団に結びつけている緊密な友愛関係とを利用して、島での全財産を売却して得た金をそっくり全額その銀行に預託する。しかし、フランスに帰って引き出すつもりだった預金を、彼はついに鐚一文取り戻すことができなくなる。教団の会長に宛てて、むなしいとわかっていながらも執拗に何度も手紙を書きおくったあげく、彼は幼少期に端を発する絆の不幸の極みを物語る報告をしている。しかし結局は諦めて、訴訟を始める。教団とのこの決裂は、彼のオカルティズムへの接近と時期を同じくしており、創作活動を促す原動力となっているようだ。一七六二年、『オリヴィエ』という表題の、韻文と散文とを結び合わせた十二歌からなる詩篇が出版される。そのあとに、『にわか貴族』という意表をついた題の本がつづく。そして一七七二年に、『悪魔の恋』が出版される。これがあまりにも

大当りしたために、彼は、信者が秘密にしなければならない奥義を暴露したと告発される。批評家たちは、当然ながら、悪魔との出会いを作者の想像に帰そうとした。彼はつとに幻視家として聞こえていたから、彼自身の死と恐怖政治とに関する予言がそのせいにされたのも当然であった。それはともかく、当のカゾットはこう言明している。「ぼくらは父祖の霊たちの間に生きている。目に見えない世界がぼくらを取りまいている……　ぼくらが思いをはせる友人たちが、絶えず親しげにぼくらに近寄ってくる。ぼくは見る、善を、悪を、善人たちを、悪人たちを。往々にして、それらの存在者たちは、ぼくが彼らを見ているうちに、入り乱れてごっちゃになり、肉体を装って生きている者と、そんな粗野な外見など脱ぎ棄ててしまった者とを、そもそも最初から識別することなど、ぼくには必ずしもできないほどである……」さらにまた付け加えて言う。「今朝、全能者の眼差しのもとに、われらを一つに結び合わせていた祈りの間、堂内はあらゆる時代、あらゆる国の生者と死者とでみちあふれ、ぼくには生と死とを見分けることができなかった。それは奇妙な混乱だったが、また壮麗な光景でもあった。」

熱烈な君主制主義者であった彼はルイ十六世支持をけっして隠さない。一七九二年八月、当局は、陰謀を企んでいると考えられる文面の数通の手紙を押収する。カゾットは逮捕され、娘のエ

リザベートも自分からすすんで下獄する。運命は彼に素晴らしい最期を授ける。七十歳をゆうに越えてから、彼は絞首台へ上ってこう言うことができるのだから。「私はこれまでと同じように、神とわが国王に対して忠実に死んでいく」

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb